



近世大坂米価の再検討 : 「米年度」概念の提起

高槻, 泰郎

(Citation)

経済史研究, 19:25-39

(Issue Date)

2016

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/90005271>



近世大坂米価の再検討——「米年度」概念の提起——

高 槻 泰 郎

はじめに

本稿は江戸時代中後期の大坂で実現した米価について、その時系列データから年平均値を算出し、観察を行うものであるが、既存研究とは切り口を異にする。端的に言えば、米の生産・流通のサイクルに合わせた新たな統計量の算出方法を提唱するものである。

大坂米価に限らず、歴史上の物価データを駆使して、背後にある経済動向を記述せんとする研究は、一九七〇年代から八〇年代にかけて盛んに行われ、物価史研究と総称されている。近世日本を対象とした研究としては、全国各地

の米価系列を精力的に復元し、その動向と背景を考察した岩橋勝や山崎隆三の仕事を⁽¹⁾はじめとして、米のみならず複数の財相互の相対価格に着目し、近世期における経済構造の変動を見通した新保博の仕事⁽²⁾、米価の変動を短期・中期・長期それぞれの視点から子細に観察し、米価が何によって動いているかを丹念に分析した宮本又郎の仕事⁽³⁾などが代表的である⁽⁴⁾。

分厚い研究蓄積のなされた分野であるが、近年の近世（経済）史研究において、物価史研究はもとより、物価動向そのものが議論の対象となることは稀である⁽⁵⁾。経済学で言うところの生産（Y）に当たる統計の得がたい近世期経

済について、最も連続的かつ信頼に足る経済情報を提供してくれるのが物価である以上、物価史というアプローチが陳腐化することはないはずであるし、近世物価史研究のみを取り上げるにしても、そこで明らかにされた知見の多くはまだまだ色褪せていない。これらの知見を改めて見つめ直し、これを批判的に乗り越えることで、研究を先に進めていく努力が求められる。

そこで本稿では、「一×××年の大坂米価は高かったのか、低かったのか」というシンプルだが重要な問いが投げかけられた時、それに正確に答えられるような統計量を検討することで、この狙いを具現化したい。管見に依る限り、既存研究はこの問いへの十分な回答を用意できていない。そのことに気づかせてくれたのは、他ならぬ物価史研究であった。

宮本（一九八八）は、大坂米価が七〜一〇月に大きく変動し、一二〜四月に安定するという傾向を持つことを三井家の米価記録に基づいて明らかにした上で、「大坂米市場が正常に機能していた時代においては、当該収穫年の作物についての予想がたち、新穀が出回りはじめる七〜一〇月において毎収穫年の米価水準がある程度決定され、それが

その後一年の米価水準に影響を与えるという米価形成パターンが成立していたものと見られる」と結論している⁽⁶⁾。

この指摘は、近世大坂米市場、ひいては近世日本の米市場の特質を考える上で、極めて重要な指摘である。七月〜一〇月の相場が、その後一年間の米価水準を決定づけるとすれば、大坂米価の年平均を算出する際に、一月から二月の米価を足し合わせて平均をとるという手法や、新米が出回って一段落した時期という意味で一二月の年末相場をもって一年間の米価を代表させる手法など、既存研究において採用されてきた手法には再考の余地があるということになる⁽⁷⁾。しかし、右の指摘をなした宮本（一九八八）ですら、右の他の分析では一月から二月をもって「一年」と見なしして統計量を算出・観察している。また、七月〜一〇月を「当該収穫年の作物についての予想」の時期と見なす史料の根拠を示しているわけでもない。

大坂米市場は、かなりの程度金融市場化していたとはい⁽⁸⁾え、米という農作物を取り扱う市場であるため、農事サイクルと密接な連関を有した。宮本（一九八八）の画期的な指摘に学びつつ、本稿は、大坂米市場の構造を忠実に反映した統計量の算出を目指す。

一 大坂米市場の構造を見直す

(1) 基本的構造

江戸時代の経済状態を最も雄弁に物語る経済指標は大坂米価である。遅くとも一七世紀の後期より中央市場として機能した大坂米市場では、「諸国相庭之元方」、すなわち全国各地の米相場に基準を提供する市場として注目されていた。この大坂米価の基本統計量を算出することは、一見単純な作業のように思われるが、大坂米市場の構造に忠実な形で実行することは決して単純ではない。⁽⁹⁾

日本海沿岸諸藩、中国・九州諸藩の貢租米は、船で大坂や大津などの大市場へと運ばれ、そこで入札によって販売された。大坂や大津では、諸大名が設置した蔵屋敷が軒を並べ、ここに格納された貢租米が、米仲買人によって落札され市場に出回った。ここで注意すべきは、大坂にせよ、大津にせよ、米を落札した米仲買人には米俵が渡されたのではなく、米切手という証券が渡されたという点である。

米切手とは、大名が設置した蔵屋敷が発行した、一枚当たり一〇石の米との交換を約束する証券である。当然、商人はこの米切手を蔵に提示すれば米と交換してもらえ、

彼らは概ね市場に米切手を転売した。その転売先が大坂であれば堂島米会所、大津であれば御用米会所であった。以下では堂島米会所に焦点を絞ってみていく。

堂島米会所ではスポット取引である正米商内と、先物取引である帳合米商内の二種類の取引が行われており、いずれも一年を三期に分けて取引が行われていた。すなわち、一月八日から四月二七日（二八日）の第一期、五月七日から一〇月八日（九日）の第二期、一〇月一七日から二月二三日（二四日）の第三期であり、括弧内の日付がスポット市場の終了日である。各取引期間に挟まれた期間、ならびに盆や節句などの休日については、原則として取引は行われなかった。⁽¹⁾三期に分かれた取引期間は、それぞれ四月限市、古米限市、極月限市、又は春、夏、冬と指されることもあったが、本稿では表記の便宜上、春相場、夏相場、冬相場と表記する。

スポット市場では常時三〇銘柄ほどの米切手が取引されていたとされ、それぞれ筑前米、加賀米、肥後米などのように地域名を冠して取引されていた。それぞれ福岡藩・黒田家、加賀藩・前田家、熊本藩・細川家が発行した米切手を指すことは言うまでもない。先物市場は、これらの銘柄

の中から、取引期間ごとに米仲買人の入札（投票）によって代表取引銘柄を一つ選び、それを「立物米^{たてものまい}」と称して先物取引の原資産とした。

この立物米は、先物取引の原資産となったという意味にとどまらず、市場を代表する銘柄としての役割も負った。同時代の人々が「大坂米相場」と言った場合、それは立物米の価格を指したのであり、現存する相場帳においても、立物米に選ばれた銘柄の価格が記録されていることが多い。日経平均やTOPIXといった平均を算出するタイプの指数とは異なるが、相場の動向を代表する価格として、立物米価格が参照されたのである。

立物米は、大坂に廻送される米の量、俵拵えの品質などを尺度として、米仲買人が選ぶものであったが、冬相場と春相場は筑前米か肥後米の新米、夏相場は前年秋に収穫された加賀米が選ばれることを通例とした。例外はあるものの、一〇月から始まる冬相場と正月から始まる春相場は、同じ立物米を採用することが圧倒的に多く、また、五月から始まる夏相場に入ったところで立物米が交代することが常であった。なぜ、冬・春相場は立物米を共有し、夏相場は異なる銘柄を立物米とするのか。この問いに答えること

が、本稿の目指す基本統計量の算出に向けて重要な意味を持つため、後段で詳しく取り上げるとして、ひとまず基本構造の説明を続けたい。

右に示した通り、堂島米会所は米切手を取引するためのスポット・先物市場であり、そこでは実物の米は一切やりとりされなかった。つまり、蔵屋敷と出入りの米商によって構成される米切手発行市場（第一次市場）、幕府から公認された米仲買株仲間によって構成される米切手取引市場としての堂島米会所（第二次市場、そして米仲買人と実需層（精米業者など）によって構成される米俵取引市場（第三次市場）という三つの市場が、総体として大坂米市場を構成していたと整理することができる。¹²⁾

第二次市場たる堂島米会所で米切手を入手した者は、それを蔵屋敷に提示すれば一枚あたり米一〇石と交換してもらえたのだが、交換するまでの保管費用は払わなくてよかった。山片蟠桃は、その著「夢之代」において、「切手ニテ買ヲケバ運送鼠熱ノ費ナシ、火災ニハ懷ニ入レテ走ルベシ、ユヘニソノ術自由ナリ」と、米切手の効用を端的に述べている。さらに、米切手を担保として現金銀を融資する両替屋（入替両替）の存在も、投資家を惹きつけるのに

一役買っている。すなわち、米仲買人は米切手を買ひ、それを担保に入れて資金を調達し、また米切手を買ひ、という形で、少ない元手で大きな取引が可能であつた。⁽¹⁴⁾

(2) 「予想」を取引する市場

米という嵩の張る財について、保管費用を一切気にせずに売買できたということ、それに加えて少ない元手でも大きな取引を組むことができたということは、堂島米会所の性質を、単純な米俵取引市場のそれとは異なるものにした。すなわち、将来に関する人々の予想を、より忠実に反映した価格形成を実現したのである。⁽¹⁵⁾

将来を予想して「今」取引を行うということ、先物取引が連想されるかも知れない。事実、堂島米会所では帳合米という名の先物取引が行われていたが、米切手という証券を売買するがゆえに、スポット市場においても同じことを行い得た。⁽¹⁶⁾

近世中期に成立したと思われる「蘆政秘録」という史料には、大名の蔵米とは別に大坂に廻送されてくる納屋米の売買について、次のようにある。

堂嶋と違ひ、深き意味もこれ無く、一般に現銀商ひに

て、畢竟外浦々の振合同様手狭の売買にこれ有り⁽¹⁷⁾

納屋米については、堂島米会所と違って売買に深い意味はなく、現銀と現物のやりとりによって売買が行われるため、他の市場と同じように手狭の取引に過ぎない、と手厳しい。現銀がなければ取引に参加できないため、取引が薄くなると考えられていたことが分かる。

では、ここで言う「深き意味」とは何を指すのであろうか。同じ「蘆政秘録」の、右に引用したくだりとは別の箇所、次のような記述がある。

米相場立て方極意の儀は、土地に有る物の多少を見込み、其年の作方、歩割を本に置き、それへ前年の作方歩割又は其の時々潤氣の善惡に、此の上の豊凶を見越し、⁽¹⁸⁾ 廉々合補を以て、日々相場生れ出で候古法の由

抽象的な文章のため、十分に意味をとることは難しいが、米相場が先の見通しに基づいて決まるものであると主張していることは確かである。其年の作柄を基本としつつ、前年の作柄との比較、そしてこの先の豊凶を見越して日々の相場が生まれるとしている。堂島米会所が、単純に足元の需給だけによって動く市場ではなかったがゆえに、「深き意味」を含む市場と見なされたのであろう。

右で縷々説明した大坂米市場の性質を踏まえた上で、冒頭にも掲げた以下の問いを投げかけてみたい。一×××年の米価が高かったのか、あるいは低かったのかを判定するためには、どの時点の、どのような情報を参照すればいいだろうか。

既存研究に学ぶ限り、そこには大きく分けて二つのアプローチが存在する。第一に記述史料に基づいて判断する方法である。今年は米価が高い（低い）と書いてあれば、当事者の実感としてこれを採用する方法である。この方法は、同時代感覚から外れないため、手堅さがある反面、米価が絶対的に高い（低い）のか、他所や他年代に比べて相対的に高い（低い）のかを判断するのが難しいという欠点がある。

第二の方法は、正月から一二月までの各月の米価を平均する、あるいは一年の内の特定時点（例えば新米出回り時期の十一月や年末など）における価格を、その年の代表値とすることによって、高低を判断する方法である。これは既存研究において広く採用されている方法であるが、一つの問題がある。それは、暦上のサイクルと、米の生産・流通のサイクルとが一致しないという問題である。

（3）「米年度」という概念

大坂米市場では、ある年の米価格を新米価格と古米価格とに区別していた。新米・古米と呼称することもあれば、子年米、丑年米などと十二支によって区別することもあった。新米と古米の入れ替えは、夏相場の終わり（二〇月九日）と冬相場の始まり（一〇月一七日）の間に行われた。

ここで立物米も入れ替わり、一年前に発行された米切手は古米切手となり、新米の米切手取引が始まった。夏相場が「古米限市」とも呼ばれた所以である。したがって、米相場の新年度は冬相場によって始まり、翌年の一〇月九日（夏相場の最終日）で終わると考えてよさそうなものである。

しかし、先に述べた堂島米会所の性質により、その年の米価は、一〇月以前から予想され、価格に反映されている。それが夏相場である。五月から始まる夏相場は、加賀米を立物米とすることが多いのだが、ここでの取引は加賀米に対する需給を純粹に反映するのみではない。その年の米の収穫高を予想しながら、売買が行われているのである。この点を確認するために二つの史料を提示する。

年五月より八月中迄は、休日たりとも、帳合米丈け早朝より午の刻迄商ひをするなり、是を内景気とも、

内証共いふ（「稲の穂」¹⁹）

嘉永六年（一八五三）以降に成立したと考えられる堂島米会所の用語集「稲の穂」によれば、毎年五月から八月までは、相場が休みの日であつても先物取引が開かれるとされている。公的な相場ではないため、「内証」と称されたのであろう。

また、同じく幕末に成立したと考えられる「八木のはなし」は、「こそ株」と呼ばれる株があり、これを有する人々が、先物取引が終わつてから次の日の朝、取引が始まるまでの間、夜間取引が行われていたと説明した上で、次のように述べる。

此市は多く六七月の頃、天災にて相場の大高下する時を専らとする相場にて、多分正米・帳合の商人共繋ぎにする相場なり（「八木のはなし」²⁰）

毎年六月と七月の間、つまり天災で相場が大高下する時期を舞台として行われたのが右の「こそ」と称された夜間取引であり、米商がスポット・先物両市場をまたいで売買のポジションを組むのに利用されたとする。

右に挙げた二つの史料から、例年五月から八月の間は休日取引が行われ、特に六月から八月は夜間取引も行われて

いたこと、それは天候によつて相場が大きく動く時期であるがゆえであつたことが分かる。ここから五月から始まり一〇月の上旬で終わる夏相場の性質を考察するに、その年の作柄を占う相場として開かれていたと考えるのが自然である。米の作柄を大きく左右する梅雨時、台風の到来時期に開かれた市場であるからこそ、休日や夜間における取引が求められたのである。

以上を踏まえると、例年五月八日に始まる夏相場から、その年の米相場は始まっていると見なすべきであることが分かる。田植えが行われてから刈り入れが行われるまでの期間、天候に対して誰もが敏感になる期間に、人々の予想が夏相場で戦わされ、一〇月下旬から始まる冬相場と春相場において、確定した作柄と、それに対する需要によつて相場が形成される。この五月から始まり翌年四月に終わる「米年度」²¹と言うべきサイクルこそ、大坂米市場のサイクルであると本稿は結論する。

ここで先に掲げた問いに戻ろう。ある年（例えば丑年）の米価が高かったのか、あるいは低かったのかを判定するためには、どの時点の、どのような情報を参照すればいいだろうか、という問いに対して、丑年の正月から一二月の

米価を平均するというアプローチは不適切であることが分かった。丑年の一月から四月までの米価は、「子年秋の作柄」を反映した価格であるのに対して、丑年の五月から二月までの米価は「丑年秋の作柄」への予想と、その確定値を反映して形成される価格であり、これらを混合して平均を計算してしまうと、状況の異なる二ヶ年を平均してしまふことになる。したがって、丑年の米価を評価するならば、丑五月から寅四月までの米価、あるいは丑一〇月から寅四月までの米価をもって評価すべきということになる。

さらに一つ前の問いに戻ろう。なぜ、冬・春相場は立物を共有し（筑前米、肥後米など）、夏相場は異なる銘柄を立て物米とする（加賀米など）のか。右の説明が答えになっている。子年の冬相場と、丑年の春相場は、暦の上では年をまたぐとはいえ、もはや確定した子年の作柄に基づいて開かれる相場であり、その意味では同質的な市場であるため、立物米を新たに選び直す意義は薄い。一方、丑年秋の作柄を予想して取引が行われる丑年の夏相場は、米の収穫後に開かれる冬・春相場とは本質的に異なる、米の生産期の相場であるため、立物米を入れ替えて新たに開始する必要があったのであろう。

冒頭で紹介した通り、宮本（一九八八）は、大坂米価が七〜一〇月に大きく変動し、一二〜四月に安定するという傾向を明らかにした上で、「当該収穫年の作柄についての予想がたち、新穀が出回りはじめる七〜一〇月において毎収穫年の米価水準がある程度決定され、それがその後一年の米価水準に影響を与えるという米価形成パターン」の存在を指摘した初めてにして唯一の研究である。本稿のこれまでの論証は、この指摘を史料的に裏付けたことになる。

次なる作業は、「米年度」に基づいて統計量を算出することである。右の画期的指摘をなした宮本（一九八八）ですら、一月から二月を「一年」として様々な統計量を算出・観察しているため、これらと、「米年度」に基づく統計量を対照させる必要がある。

二 統計量の算出・観察

（一）三井大坂両替店「日記録」について

本稿が大坂米価の時系列データとして参照するのは、三井大坂両替店が作成した業務日記「日記録」である。²⁰「日記録」は、享保二年（一七一七）から明治六年（一八七三）に至るまで、全一一五冊が公益財団法人三井文庫に残され

ているが、その内、天明七年（一七八七）より明治四年（一八七一）までの六六冊（欠損年を含む）には、大坂の立物米価格と金銀比価が毎日記録されており、三井文庫の前身にあたる三井家編纂室が、この情報を整理して、大正五年に刊行している。⁽²³⁾ 宮本（一九八八）が依拠したのも、この三井家のデータであるため、本稿も同じデータによって統計量を算出し、比較を試みる。⁽²⁴⁾

なお、分析期間は一八五八年までとする。これは、安政五カ国条約に基づいて開港がなされた後では、経済構造が大きく変化するため、本稿の分析にそぐわないと判断したことによる。⁽²⁵⁾

（２） 閏月と「立替」について

三井家のデータは、欠損年が少なくないとはいえ、日次でデータを提供してくれる使い勝手のよいデータであるが、他の米価統計と同様、閏月の問題と、立物米が入れ替わる（立替）という問題は避けがたいものとして存在する。まず閏月について、物価史研究においては、前月のデータと合わせて一ヶ月とみなすというやり方が一般的である。すなわち、平均米価を算出する場合は、六月の平均米価と閏

六月の平均米価を足して二で割って六月の平均米価と見なす、という作業を行うことである。全く問題なしとはしないが、大まかな傾向を掴む上では妥当な処置と考えられるため、本稿もこの方法を踏襲する。⁽²⁶⁾

また、夏相場の立物米が加賀米、冬相場と春相場の立物米が筑前米である場合、これをつなげて一本の系列として大坂米価と見なしてよいか、という問題がある。⁽²⁷⁾ 他の史料から加賀米や筑前米の価格データを外挿して、加賀米ないし筑前米の価格で一年間をつなげることも不可能ではないが、立物米に選ばれている期間の加賀米（筑前米）と、そうでない時の加賀米（筑前米）とは、当然価格形成を異にする。銘柄を統一したところで、連続的かつ同質的なデータとなるわけではなく、根本的な解決策にはならない。

もともと、厳密な対応をとるべきか否かは、分析の目的に依存する。本稿では年次平均をふたつの方法によって算出し、その結果を比較することに主眼を置くため、当座の措置として立替を意識せずに平均を算出することにした。

（３） 米価の平均値と標準偏差の推移

表１は三井家のデータによって見た立物米の年次平均価

格の推移である。図1と図2は、それをグラフ化したものであるが、ここでは揭示の都合上、区間を二つに分け、縦軸のスケールも変えている。いずれのグラフについても、一月から一二月の区切りで算出した年次データと、同年五月から翌年四月の米年度区切りで算出した年次データを対比している。比較を分かりやすくするため、前者が一七八八年であれば、後者も一七八八年度として、横軸を揃えている。説明の便宜上、以下では西暦を用いて年度を表記する。

まず明らかなことは、暦上の年度で算出したデータと、米年度で算出したデータとで、無視できない差が生じている年が散見されることである。例えば表1ないし図1において、一七九三年の差が大きいが、これは、一七九二年秋の高米価水準が、一七九三年四月まで続いたのち、同年夏から秋にかけて低水準に戻ったことによる。一月から一二月の区切りで平均してしまうと、一七九三年一月から四月の高水準と、同年の夏から秋にかけての低水準を混合して一七九三年の平均値を算出してしまうため、一七九二年の高米価水準が一七九三年まで続いたように見えてしまうのである。米年度で見ると、一七九三年度の年次平均米価は約六三匁六分と平穏な数値を示しており、これがこの年

の実態を反映しているのである。

こうした差が、米価が大きく変動するときに生じやすいことは言うまでもない。試みに天保飢饉の影響が三井家のデータで観察できる一八三六、三七年度の動きを表1ないし図2において見ると、やはり差が大きいことが分かる。注意すべきは、暦通りの年次データにおける一八三六年度は、高水準とはいえ、翌年度よりも低く算出されていることである。これを見ると、一八三七年度にピークが来ているかのような気がするが、米年度で算出すると、米価は一八三六年度から一三〇匁台後半の高水準であったことが分かる。これは一八三六年前半の米価が平穏だったことにより、一八三六年一月から一二月で平均してしまうと、一〇〇匁強の平均値にとどまることによる。米年度をまたいで平均を算出してしまうことの弊害と言っていいたいだろう。

参考までに、全対象期間について、五月から一〇月と、一月から翌四月までのそれぞれの期間について、月次標準偏差の平均を算出したところ、五月から一〇月の期間は約二匁七分、一月から翌四月までの期間は約一匁三分となった。つまり、夏相場の標準偏差は、冬・春相場のそれよりも顕著に高かったのであり、梅雨時ないしは台風シ-

表 1 大坂立物米価格の年次平均値

暦上の年度		米年度		暦上の年度		米年度	
年度	価格(匁)	Num	価格(匁)	Num	年度	価格(匁)	Num
1787	104.34	251	—	—	1823	56.48	242
1788	—	—	—	—	1824	57.83	244
1789	60.53	265	—	—	1825	60.72	173
1790	—	—	—	—	1826	—	—
1791	—	—	—	—	1827	54.30	242
1792	76.84	254	78.24	238	1828	63.36	243
1793	72.25	228	63.56	225	1829	—	—
1794	57.39	230	—	—	1830	73.48	137
1795	—	—	—	—	1831	—	—
1796	—	—	—	—	1832	66.01	260
1797	62.54	232	61.88	222	1833	—	—
1798	63.34	114	61.65	60	1834	—	—
1799	58.02	23	65.53	91	1835	—	—
1800	67.71	213	66.93	164	1836	103.33	246
1801	64.70	144	—	—	1837	168.45	243
1802	—	—	—	—	1838	103.24	269
1803	—	—	—	—	1839	—	—
1804	50.94	193	52.68	207	1840	64.32	233
1805	53.50	259	53.78	259	1841	62.91	272
1806	55.69	227	—	—	1842	65.72	230
1807	—	—	—	—	1843	65.73	267
1808	65.62	222	66.35	244	1844	70.27	250
1809	61.59	238	56.92	232	1845	76.80	240
1810	53.76	229	55.41	194	1846	83.27	247
1811	64.38	265	57.95	232	1847	78.43	244
1812	55.25	236	54.20	240	1848	79.51	245
1813	61.49	267	65.02	253	1849	85.18	269
1814	68.32	227	—	—	1850	110.75	234
1815	—	—	—	—	1851	104.66	247
1816	59.32	265	62.98	269	1852	75.39	244
1817	64.21	245	—	—	1853	89.23	227
1818	—	—	—	—	1854	93.33	249
1819	—	—	—	—	1855	73.65	222
1820	48.04	240	—	—	1856	74.74	222
1821	—	—	—	—	1857	89.78	233
1822	53.32	276	55.65	247	1858	115.00	203

注 1：三井家のデータは、三井家編纂室編『自天明七年至明治四年大阪金銀米銭并
為替日々相場表』（巻一・巻二）同室発行、大正五年より引用。

2：Num は日次サンプル数を指す。

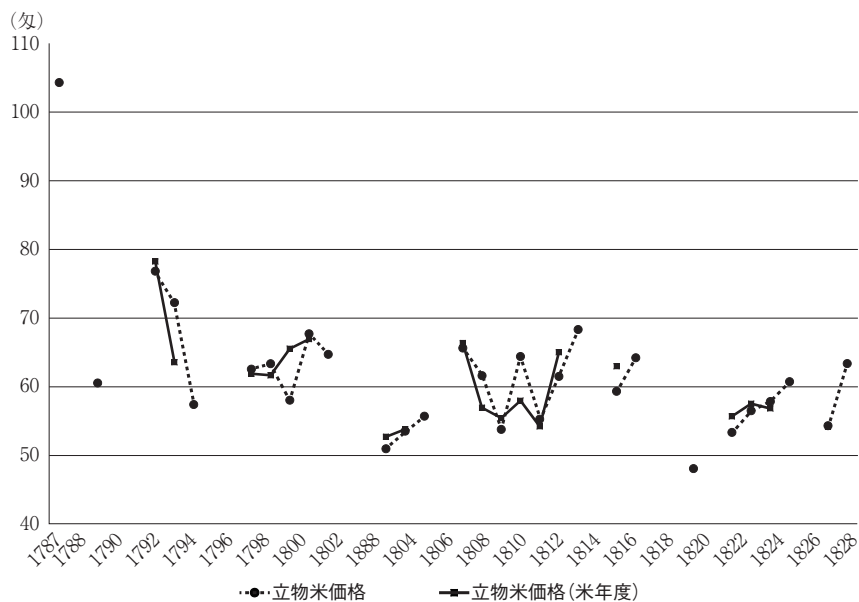


図1 大坂立物米価格の年次平均値(1787年度～1828年度)

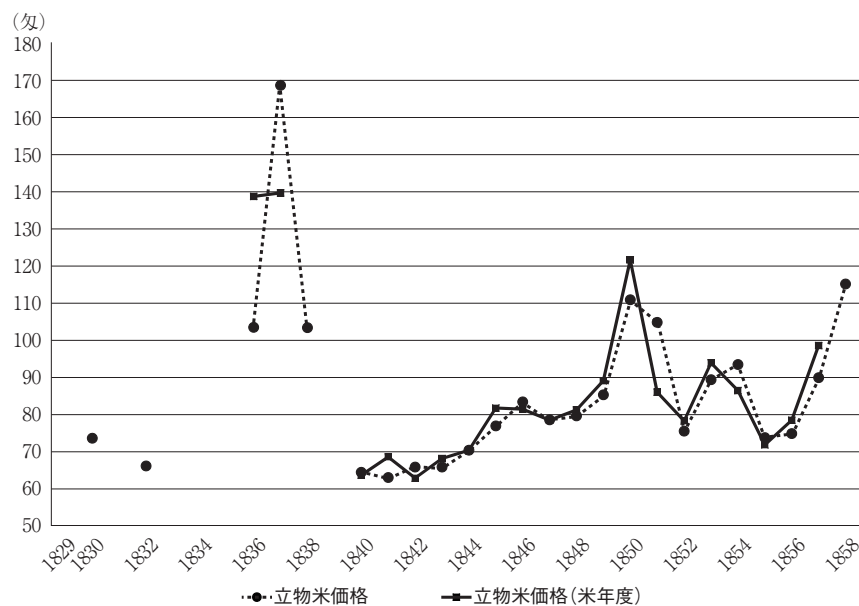


図2 大坂立物米価格の年次平均値(1829年度～1858年度)

注：図1・2とも出典は表1に同じ。

ズンにおける相場であったことを反映していると言えよう。無論、年次平均など算出せずに、月単位で米価を観察していれば、本稿が指摘したような問題が生じる余地はない。しかし、「 1×10^6 」年の米価は高かったのか、低かったのか」という問いは、多くの歴史研究者が抱くものであり、それに応える統計量として、年次平均米価を経済史家が提示することはやはり必要であろう。また、たとえ月単位で観察する場合であっても、米年度のサイクルを意識した観察・分析がなされなければならない。一月から四月までと、五月から後ろとでは、取引の質が異なるからである。

おわりに

本稿では米年度という新たな概念を用いて、大坂米価の基本統計量を算出する新方式を提案した。五月に始まり、翌年四月に終わる米年度に基づくことにより、一月から二月の区切りで算出する年次平均よりも、実態に即した年次平均を算出できることが明らかになった。ここでは米年度という新概念の提起に主眼を置いたため、大坂米価の年次平均値に視点を絞ったが、大坂以外の米価にも対象を広げ、また三井家以外のデータも駆使しながら、基本統計量

の算定をしていく作業がこれから求められる。またその際に、既存研究が作成した米価系列との対照作業も必要であろう。課題は山積しているが、ひとまず分析を終えたい。

最後に、「数量経済史研究の現況」と題する小特集に寄せて付言しておきたい。現在、「数量経済史」の看板を掲げて研究を行う若手研究者は皆無と言っている。経済史研究において数量（計量）分析を行うことは当たり前となってきたおり、あえてそのような看板を掲げる必要はないからであろう。しかし、自戒を込めて、次のことを確認しておかねばならない。計量経済学との出会いにより、経済史研究がより豊かになるか否かは、歴史家としての力量が発揮できるか否かにかかっている。歴史家であるがゆえに可能となる数量分析が志向される限り、看板はどうあれ、数量経済「史」研究の精神は不朽である。

〔付記〕 本研究は、JSPS科研費 23201100 の助成を受けた研究の成果、および総合地球環境学研究所の研究プロジェクト「高分解能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索」の成果に基づくものである。統計量の算出に際しては、神戸大学経済経営研究所の柴本昌彦氏の助言と助力を得た。ここに明記して謝意

を述べたい。無論、あり得べき誤謬は筆者に帰属する。

- (1) 岩橋勝『近世日本物価史の研究』（大原新生社、一九八一年）、山崎隆三『近世物価史研究』（塙書房、一九八三年）。
- (2) 新保博『近世の物価と経済発展―前工業化社会への数量的接近―』（東洋経済新報社、一九七八年）。
- (3) 宮本又郎『近世日本の市場経済―大坂米市場分析―』（有斐閣、一九八八年）。
- (4) これらの仕事を提供した知見を整理する余裕はないが、同時代の研究サーベイとして、原田敏丸・宮本又郎編著『シンポジウム 歴史のなかの物価―前工業化社会の物価と経済発展―』（同文館出版、一九八五年）を挙げておく。
- (5) 管見に入った例外が、下野国芳賀郡を対象に、生業としての米作の収益性を、米価動向に照らして論じた平野哲也の仕事である（同『江戸時代村社会の存立構造』（御茶の水書房、二〇〇四年）。ここでは、江戸米価の代理指標として整備された八王子米価のデータ（山崎（一九八三）に基づく）が活用され、米価の動向に照らして生産計画を決定する農民の姿が活写されている）。
- (6) 宮本（一九八八）、第五章。
- (7) 物価史研究の最も古い例とも言え、大坂米価を調べる際に頻繁に参照されてきた草間直方筆「三貨図彙」は、掲載している大坂米価について「大抵一ヶ年平均ノ積

り」としている（瀧本誠一校閲『三貨図彙』白東社、一九三二年、九二五頁）。また、近世前中期など、連続的なデータが得られない時期について、特定の時期、例えば年末の米価などによって年次米価を代表させる方法が、岩橋（一九八一）や山崎（一九八三）などによって採用されている。これらはやむを得ない事情による部分が大きいとはいえ、後述する通り、近世後期については統計量を精緻化する余地が十分に残されている。

- (8) この点については、高槻泰郎『近世米市場の形成と展開―幕府司法と堂島米会所の発展―』（名古屋大学出版会、二〇一二年）第四章を参照のこと。
- (9) 宮本（一九八八）、第一章。
- (10) 以下、第一節第一項における大坂、大津米市場に関する叙述は、特に断りのない限り、高槻（二〇一二）に基づく。
- (11) 夏相場では休日取引や夜間取引も行われていたが、この点については後述する。
- (12) 第一次市場と第三次市場の価格データが十分に残されておらず、厳密な検証は難しいが、概ね三つの市場の価格は連動していたと考えられるため、立物米の米切手価格を大坂米価として代表させることは問題ないと判断する。この判断は当時の人々の考え方とも合致することを了承したい。
- (13) 末中哲夫『山片蟠桃の研究「夢之代」篇』（清文堂出版、一九七一年）八四一頁。

- (14) この金融的仕組みについて詳しくは、石井寛治『経済発展と両替商金融』(有斐閣、二〇〇七年)、高槻(二〇一二)第五章を参照のこと。
- (15) 無論、純粹な米俵取引であっても、将来を見越した売買は可能である。しかし、米の保管場所、元手となる現金銀を用意しなければならぬため、取引高は自ずと制約されてしまう。米切手とそれを支える金融システムは、この制約から投資家を自由にする。
- (16) もっとも、最小取引単位、手数料などの点で帳合米商内の方がより参入のしやすい市場であったことは確かである。この点について詳しくは高槻(二〇一二)の第二章、もしくは高槻泰郎「近世日本の相場指南書―大坂米市場を素材として―」(『国民経済雑誌』第二〇八巻第五号、二〇一三年)を参照のこと。
- (17) 「蘆政秘録」(島本得一編『堂島米会所文献集』所書店、一九七〇年)九―一〇頁。
- (18) 「蘆政秘録」五頁。
- (19) 「考定 稲の穂」(島本(一九七〇))、「内景気米又内証商ひともいふ」の項。
- (20) 北越逸民撰「八木のはなし」(岸上操編、内藤耻叟・小宮山綏介標註『近古文芸温知叢書 第十二編』東京博物館、一八九一年)、一七頁。なお、句読点は適宜筆者が振り直した。
- (21) 言うまでもなく「会計年度(fiscal year)」を念頭に置いて造語である。
- (22) 「日記録」の史料性格について詳しくは、樋口知子「深井孫七郎「大坂店勤番日記」その一―天明六・七年の大坂両替店―」(『三井文庫論叢』第二一号、一九八七年)。
- (23) 三井家編纂室編『自天明七年至明治四年大阪金銀米錢并為替日々相場表』(同室発行、大正五年、巻一・巻二とあり)。
- (24) 高槻(二〇一二)でも触れている通り、米価データは三井家のものに限定されない。これらを網羅的に用いた分析は、本稿の任を超えるため、別稿を期したい。
- (25) また、文化八年二月一二日から春相場の最終日である四月二八日までの米価(肥後米価格)は除外した。詳細は割愛するが、市場で紛糾が起こり、価格が人為的に一定に据え置かれた期間であることに依る。
- (26) 農事は二十四節気に従っているとはいえ、市場取引は曆に従って行われるため、閏月の影響は本来無視できないはずであるが、管見の限り、閏月が経済活動に与える影響について明示的に論じた研究は存在しない。
- (27) 実際に筆者が大坂米市場の効率性を検証した際には、春・夏・冬の期間ごとにデータを区分して、またがらないようにした(高槻(二〇一二)、第六章)。
- (28) 岩橋(一九八二)が採用したのはこの方法である。同書、二七六頁。

